



2025年10月15日発行（季刊）



羽化

ISSN1880-8646
2025年10月
第135号（最終号）

横浜漢点字羽化の会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代表 岡田 健嗣
編集責任者 宮澤 義文



葡萄の棚がづく2025

目次

顧みて（4）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（128）（山内 薫）	6
漢文のページ）	9
ご報告とご案内	13
編集後記 （宮澤義文）	15

顧みて (四)

岡田 健嗣



七 (承前)

横浜で、漢点字の書籍を製作して下さる点訳ボランティアの方を募る活動をする中で、従来の点訳ボランティアの皆様からは中々手を挙げていただけませんでした。が、お一人だけ、現在も本会の中心的なメンバーとして活動して下さいておられます吉田信子様にお会いすることができました。このことは、この募集の活動の、最大の成果でした。

この活動の中で私は、多くの点訳ボランティアの皆様にお会いしました。しかしながらその皆様からは残念ながら、ご協力をいただくことはできませんでした。その皆様とお話しをしてみますと、その皆様は、「その活動を始めるに当たり、「点字には漢字がない」という事実をお知りになって、一つ口に驚かれたとお

っしゃっておられました。漢字がなくて、日本語の表記ができるのだろうか、という当然の疑問を抱かれました。しかしながらその活動を進める内に、そのような疑問が薄らいで行き、それは普通のことだ、あるいは当然のことだと理解し、あるいはそのように納得して行かれたのだということを、私は知りました。そこでお会いした多くの点訳ボランティアの皆様は、既に深くそのような理解に入っておられまして、漢点字の存在とその必要性についてお話をしても、「むずかしい!」とおっしゃって、近づかれませんでした。その皆様は、残念ながら当初の疑問が氷解し答えを得たのではなく、活動に埋もれて疑問をお忘れになってしまったように、私には思われました。

そういう中のお一人である吉田様は、その最初の疑問を持ち続けておられました。漢字を読み取らずに、日本語の文章を読み取ることができるのか、という、日本語の表記の最も基本的な足場に対する疑問でした。

吉田様は、ご主人様のご協力をも得て、普通の文書

のファイルから、漢点字文書のファイルを作成し、さらにそのデータを点字プリンタに送って、漢点字文書を紙に打ち出すためのソフトウェアを完成させて下さりました。現在使用しているEIBRKWの前身の、EIBRの完成です。これによって、私どもはオリジナルのソフトウェアを手にするようになりました。このソフトウェアを手にしたことによって、吉田様と念入りにご相談して、私ども独自の、パソコンを使用した、漢点字訳のボランティア・グループを作ろうという運びになりました。一九九五年のことでした。

一九九六年の一月末日、漢点字訳ボランティアの講習の呼びかけに応じて下さった皆様にお集まりいただき、漢点字訳の手順・方法について、お話しすることになりました。この日、本会は産声を上げたのです。

その時お集まりいただきました方々のなかに、現在も活動の中心を担って下さっておられる皆様がおられますし、取り分け、木下和久様がご参加下さったことは、私どもには天からの恵みとも言うべき吉兆でした。

た。木下様は、吉田様のご主人の製作して下さったEIBRを、さらに進化し深化させて下さり、現在私どもが使用しております漢点字変換プログラムEIBRKWを完成させて下さいました。これによって、一般文書から漢点字文書への変換ばかりでなく、漢点字文書の中での編集が可能になり、さらに、その漢点字データをピンディスプレイにも送信して、漢点字文書をピンディスプレイに表示させて、それを触読しながら文書を作成し、編集するという、エディタの機能を導入することになりました。これによって、視覚障害者の読みばかりでなく、書くことにも大きな力を発揮してくれるようになりました。

横浜漢点字羽化の会の発足と時を同じくして、横浜国立大学の村田忠禧教授が、在学の視覚障害学生のために、漢和辞典である『漢字源』（藤堂明保編、学習研究社）の漢点字版を点字プリンタで打ち出しておられるというニュースを入手しました。早速先生にお電話をかけてお伺いしましたところ、学習研究社様から電子データをご提供いただいて、墨田区の図書館で動いている末田先生の開発されたプログラムと同じ装置を使って打ち出しておられるということを知りました。

た。

そこで村田先生にお願いして、私どもにも同じ電子データのご提供をお聞き入れただけなものか、学習研究社様に伺っていただきましたところ、即刻ご快諾いただき、『漢字源』の電子版を、大学ばかりでなく私ども一般の視覚障害者も、漢点字で読める道が開けました。

従って本会の活動は、活動開始と共に、大きなプロジェクトを抱えることとなって、今思えば、一九九六年は、正にてんやわんやの年となったのでしたが、木下様の指揮の元、翌年の三月には、製本を終えた九〇分冊の漢点字書を完成させ、受け入れを決めて下さっていた横浜市立中央図書館に、納入することができました。

漢点字訳という本会の活動の中心である入力・校正というプロセスが、電子データのご提供をいただくことで割愛できたとは申しても、点字書九〇分冊を打ち出し・製本するという作業は、並大抵ではなかったことは言うまでもございませんが、この完成がもたらし

たものの計り知れなさは、現在にまで及んでいるものと存じます。

八

〈語彙が多いとか少ないとかいうけれど、人間はどのくらいの言葉を使うものなのか。〉

例えば新聞や雑誌に使われている単語は、年間およそ三万語といわれています。しかし、その五〇〇六〇パーセントは、年間の使用度数１です。つまり、半分の単語は新聞・雑誌で一年に二度とお目にかかることがない。

ちよつと古いけれど、昭和三〇年代の調査では、高校の上級生が三万語の語彙をもっていたという調査結果があります。今は大学生でも語彙は平均一万五〇〇〇か二万くらいに落ちていっているのではないかと思います。読書量がものすごく減っていますから。

生活していく上で間にあうという数でいえば、三〇〇〇語あれば間にあう。だいたいは生きていられる。これが、いわゆる基本語です。では、三〇〇〇語知っ

ていればいいか。言語生活がよく営めるには、三〇〇〇では間にあわない。三万から五万の単語の約半分は、実のところは新聞でも一年に一度しか使われない。一生に一度しかお目にかからないかもしれない。しかし、その一年に一度、一生に一度しか出あわないような単語が、ここというときに適切に使えるかどうか。使えて初めて、よい言語生活が営めるのです。そこが大事です。語彙を七万も一〇万ももっていたって使用度数一、あるいは一生で一度も使わないかもしれない。だからいらないのではなくて、その一回のための単語を蓄えていること。

例えば「味」についていえば、「味得（みとく）する」という単語があります。これは確かに使用度数は少ない。今やもう、ほとんど使わなくなっているけれど、なにかの時に「それが味得できた」と使うことでピタッと決まることがある。「深い、かすかな味わいが分かった」では、文章の調子、文体としてだめなきがある。文章を書くには、一度使った単語や言い回しを二度繰り返さないという文章上の美意識がある。

それに触れる。何か別の言い回しが必要になる。そのとき、その書き手がどれだけ語彙をもっているかが問題になる。類語辞典が役立つのはそういうときです。

なんでもかんでもむずかしい言葉をたくさん覚える必要があるといっているわけではありません。そのときに、ピタッと合う、あるいは美しい表現ができるかどうか。それが問題です。それが言語の能力があるということです。歌人や小説家が辞書を読んで単語を覚えようとしたのは、そういうときに備えたいからです。だから、読み手もその細かい心づかいにつきあうだけの感度をそなえていなくてはいいい読者といえません。～（大野晋著『日本語練習帳』、岩波新書596）

少々長くなりましたが、これは、本会が活動を開始したところに、会員の皆様をお願いして作っていただいた漢点字書の一冊です。

『漢字源』の漢点字版に着手する前に、私は、今後どういう本を漢点字訳するのがよいかということをし、

考えました。これまでの点訳・音訳の活動を見ており
ますと、まず世の中でよく読まれているものから作ら
れているようでした。確かに話題性のある本から作る
というのも、一つの方法と言えます。たまたまそのよ
うな本がない場合もあります。そういう時は、書店に
行つて、平積みになっているものから選ぶ、というこ
とが行われていました。現在もそうかもしれません。

しかしながらそういう本は、何年かすれば忘れられ
てしまうという憂き目に合いがちなもので、私と致し
ましては、折角お集まりいただいた会員の皆様にお願
いするのですから、何時読んでも古くならない、しか
も分かり易いという、矛盾に満ちた希望の元に選書し
ようとしていました。そういう悩みを墨田区の図書館
にお勤めの山内さんにご相談した時にご紹介いただい
たのが、この『日本語練習帳』（大野晋著）という本
でした。

この本の体裁は、書名の通り「練習問題集」という
もので、大野先生が課題を出されて、読者が考えて答
えを出すというものでした。そして先生が提示された

模範解答を見、解説を読み、読者が検討して先生のお
考えを理解し、自らの理解を再検討するというもので
した。

しかし読み進めている内に分かつて来ることは、い
わゆる練習問題集とは違うなあとということ、ここで
扱われている問題は、学校の試験問題には出て来ない
ものだということです。むしろ、学校では教えないこ
とばかりで、しかも日本語を聞き、読み、発言するに
当たつて大変重要なポイントを占める事柄ばかりだと
いうことでした。

例を挙げれば、私たちは「…とします。」とか、
「…とを考えます。」という言葉をしばしば使います。
「思う」と「考える」という語を、同じように使うわ
けですが、この二つの語が、別の異なる語だというこ
とは、よく知っている積もりでもあります。とは申し
ても、「思います」「考えます」と使用する時は、ど
こまでそれを意識しているのでしょうか、ということ
でした。

先生は、こういう語の意味する範囲をよく見極める

ことが大事だとおっしゃいます。そして「思う」という言葉と「考える」という言葉が、どうい場合に交換可能か、また、どうい場合に交換ができないかを知っておくこと、考えておくことが大事なのだとおっしゃって、幾つかの例を挙げて説明しておられます。

「思う」と「考える」という単語の意味は、それぞれに一つの範囲を占めています。その範囲も、ぴったりに重なる訳ではありません。ぴったり重なっているのであれば、この二つの言葉の一つは必要なくなりま。す。この二つの語は、本来は別の単語ですので、本来はぴったり重なりません。ところが、どちらを使っても意味としては通用するのですから、その意味の範囲が、どこかで重なっているようなのです。その意味の重なりによって、「…と思います」と「…と考えます」とが、交換可能ということになって、私たちは、軽い気持ちで、適当にその時の気分で、「思う」と「考える」を使い分けている積もりになっているようなのです。

先生は、そういうところにもう少し慎重な対応がで

きれば、あなたの書く文章も、もっとスマートなものになりますよ、とおっしゃっておられました。

右の引用文は、「語彙」について述べられたものです。「語彙」を豊かにすることが、言語生活を豊かにすることに繋がるのだ、とおっしゃっておられます。

私はこの文章を読んで、私たちの脳が、その大半を使用されずに一生を終えるのだということを思い起こしました。脳は、その使われない部分を余力としてキープしていることで、私たちの頭脳として機能できるので、その余力の支えがなければ、その必要な余力の分だけ小さなものになるのであろう、ということなのです。

「語彙」も、できるだけ多くの語を身につけることが肝要だということです。

先生はこの引用文に先だって、一つのエピソードを紹介されておられます。ノーベル賞作家の大江健三郎氏は、『広辞苑』を三冊反故にされたということ。す。それだけ『広辞苑』を開いておられたということです。作家として、どれだけ「語彙」を持つことがで

きるかが、生命線だと考えておられたと言うことでした。誠に想像を絶することです。

また一つ、思い出しました。

何方が言われたかすっかり忘れてしまいました。が、「量が質を決定する」という言葉があります。この意味はよく分からなかったのですが、この「語彙」のお話しからしますと、同様のことを言っているのか、と腑に落ちた思いがしました。

さてここで私は、はたと気付くことになります。

大野先生が「語彙」について述べられました。確かに貴重なお話ですし、私にとって大変参考になるお話でした。

しかし、ここで言われる「語彙」とは、文字で書かれた言葉のことで、音声言語しか知らない者は、このお話しを参考にすることはできないのではないのか、と気付かされたのでした。

私も二十九歳まで文字の世界を、日本語では文字と言えば漢字を指しますが、知りませんでしたので、こ

の「語彙」と言われても、現在の視覚障害者の大半が、漢字を学ぶ機会を与えられていないままになっている現状を思いますと、この「語彙」は、視覚障害者には縁の薄い言葉に違いありません。場合によっては暴力とも受け止められかねないかもしれません。「語彙」を豊かにせよ、うんそうだ「語彙」を豊かにしよう、と思っても、現在の視覚障害者にはそれは叶わないのです。

現在の視覚障害者の言語の状況を、この「語彙」の角度から見てみましょう。

漢字を学ぶ機会を与えられずにいる視覚障害者は、日本語を母語とする限り、無文字のままに置かれていると言えます。

日本語では、漢字の読みには音読と訓読があります。逆に言えば、音読と訓読があるのが日本語で使われる時の漢字です。音声言語しか使えない者である視覚障害者にとって、その音読や訓読は、無いに等しい概念であると言えます。その中心となる漢字の知識を学ばなければ、単に音声としての言語としてしか、

知り得ません。

例を挙げますと、「後」という漢字があります。音読は「コウ・ゴ」、訓読は「うしろ・あと・のち」です。

これを漢字の知識のない人が耳にした場合、どのように受け止められるでしょうか。訓読の「うしろ・あと・のち」は、ばらばらの「うしろ」、「あと」、「のち」と、三つの単語として受け止められることになるはずです。それに音読の「コウ」と「ゴ」、語の数としては五つの単語として受け止められて、別々の語と捉えられるのではないのでしょうか。

そこに漢字の知識を持ち込みますと、音読の「コウ・ゴ」と、訓読の「うしろ・あと・のち」が、「後」という漢字によって結びつけられて一つの文字とその読みとなります。

「語彙」として見ますと、「コウ」「ゴ」「うしろ」「あと」「のち」の五つの読みは、そのまま五個の「語彙」となりますし、それを取りまとめた「後」という文字も、「語彙」の一つとなります。「後」という漢字がそこに存在するかどうかで、ばらばらにな

ったり一つにまとまったりするということで、漢字の知識がどれだけ重要なものかということが知られます。

それでも「後」の訓読は「うしろ・あと・のち」と、意味的には共通するところがありますので、音声言語しか持たない視覚障害者にも、「後」という漢字があるのだ、と言えば、それなりの理解を得られるかもしれません。しかし漢字は一つ二つではありません。数多く、複雑です。一筋縄では参りません。

「究」と「窮」という文字があります。どちらも音読は「キュウ」、訓読が「きわまる・きわめる」です。それなら同じ意味の文字かと言えば、そうではありません。

「究」の訓読の「きわまる・きわめる」は、学問や技芸を研ぎきわめること、追究し探究することです。

「研究」とか「究極」という音読の熟語を作ります。「窮」の訓読の「きわまる・きわめる」は、追い詰められて抜き差しならない状態になることを意味します。「困窮」、「窮鼠猫を噛む」、「進退窮まる」と使われます。

どちらもその訓読は、行くところまで行くというこ

とを表すものですが、意味としては、正反対を示す文字とも言えます。この二つの文字では、「きわまる・きわめる」という同じ訓読が当てられています。もとこの訓読の幅が広く、その幅の端と端とは正反対の意味ともなっていたのではないかと考えてよいようです。二つの漢字がその意味を分担して現在のようになつたのでしょうか。どちらも音読が「キュウ」ですので、音声言語しか持たない、漢字の知識の希薄な視覚障害者には、判断するのは、極めて困難な文字だということが出来ます。（ここで、訓読の幅と申しました。便宜上そのように説明してみましたし、間違いではありませんが、むしろ「きわまる・きわめる」という訓読に、「とことんまで押し進める」という意味と、「行き詰まってくるしむ」という意味があると理解するのが一般だと思われます。）

「究」と「窮」のように、訓読の指示する意味の範囲が広く、幾つかの漢字がそれを分担する例は沢山ありますが、この二つの文字のように、音読も同じという文字は、多くはありません。もう一組挙げれば、

「所」と「処」です。

この二つの文字の音読は「シヨ」、訓読は「ところ」です。しかもその意味もほぼ同じと言ってよい文字です。

ところが使用される熟語を見ますと、「場所」「住所」「所在地」、「処理」「処分」「処置」と、厳然と分けられています。見事なほどに、使い分けされています。しかしこれは、それほど古いころからではないようで、明治から昭和の初期にかけての文章には、「処」を訓読の「ところ」として使用されたり、現在では「所」が使われるところに「処」が使われたりする例が少なくありません。現在のように、文字の意味とは別に、その熟語上の使用がしっかりと分けられているということにも、興味を惹かれます。

以上のように、音声だけの言語生活をしている現在の視覚障害者にとつては、漢字という文字の存在は知っていても、そのままでは漢字を学ぶ機会を得られません。従つて、「語彙」を豊かにしたいと希望しても、その方法はありません。

ここまで考えて参りまして、私どもの活動は、何をやって来たのかと、しばし立ち止まって見る気持ちになります。

音声言語しかない現在の視覚障害者の大半を対象に、「語彙」を豊かにしよう、と声を上げるということとを私は行っています。右に述べて来ましたことから、こういう呼びかけは、極めて矛盾だということを、残念ながら認めざるを得ません。どう矛盾しているかと申せば、漢字の知識のない人々に対して、日本語は漢字に支えられているのだから、漢字で書かれる言葉を数多く習得しようではないか、こういうことを申し上げているのだということです。漢字を使用できない人々に、漢字を使った言葉を沢山覚えようと言っているのです。

もしこのことを矛盾無く進めるのであれば、「語彙」を増やす前に、「漢字」を学ぶことから勧めるはずです。「漢字」を習得しますと、その過程で、「語彙」も次第に増えて行きます。「漢字」の学習こそが、視覚障害者の精神活動を、そのまま豊かにしてくれるのだということなのですから、そこから始める必

要があるのです。その道筋を辿れば、漢字の知識のない人に、「語彙」を増やそうなどと、矛盾に満ちた言葉を発する必要がなくなります。

ところが、ここで私は次の矛盾に行き当たっています。

漢点字を学んで、漢点字を使って生活していると称する視覚障害者の人たちも、私の知る限り、本を読もうという動きがほとんど見られません。点字の漢字である「漢点字」を学んでも、読書には、なぜか結びつかないのです。

ずっと以前のことですが、私は漢点字使用者の人に、「本を読みましょう」と言ったことがありました。そうしますと、「本を読むのは個人の自由ではないでしょうか。あなたにそのようなことを言われたくありません。」と言う声が返って来ました。本を読むのは自由意思によるのだから、あなたに強制されたくありません、というのでしょうか。私は意表を突かれた思いで、慌てて「強制なんかしません。」と言いましたが、聞く耳を持たれなかったようです。（一般社会で「読書をしましょう」と言っても、取り立てた反

応はないのが普通ですが、視覚障害者にこのように申しますと、強烈な反応が返って来ます。」

思えば、大野先生もこの本を著すに当たり、現代人の「語彙」の減少を嘆いてのことだと言うことが、引用の文章から読み取れます。日本の一般の社会で行われている言語活動である「漢字仮名交じり文」で読み書きしている人たちも、その言葉を使い続けているのが現状だとおっしゃっておられるのです。そこから勘案すれば、現在の視覚障害者が努力して漢字を習得し、読書に励むという姿を思い浮かべるのは、非常に困難だという結論に達するのは、誠に容易です。

これもずっと以前に、「識字」ということを考えたことがあります。「識字」とは、文字通り「文字を知ること」です。そしてこの「識字」は、一般には「識字率」という語としてだけ通用されています。本来は「識字」で一つの語なのですが、使われる時は、「率」を伴ってだけ使われるのが一般です。

私は「漢点字」の普及活動を、「識字運動」と位置づけて行おうと思いました。そこでそのことを漢点字使用者の人たちに申し上げようとしたが、耳を傾

けて下さる方はおられませんでした。その後、私も「漢点字」の普及が「識字」であるなら、現在の視覚障害者を、「非識字者（文盲）」と位置づけることになって、その意味ではそのようにレッテルを貼る（当事者からすれば張られる）ことに気付いて、このような表現はなおさら反発を買うであろうと思い、控えることにしました。私自身は、漢点字習得以前の私を、その当時（盲学校在学中から漢点字に出会うまで）、既に「非識字者（文盲）」と位置づけるのに躊躇はありませんでした。従って私は、「漢点字」を学ぶことによって、「非識字（文盲）」の状態を、何とか克服できたものと理解しております。

触読文字では、「漢点字」以外に「漢字」を表す文字はありませんし、これまでの本会の活動を通して、「漢点字」が、少なくとも現在わが国で使用されている漢字に対応して、漢字として充分使用に耐え得る触読文字であることは、証明されたと考えます。その意味で、視覚障害者が「漢字」を習得するためには、この「漢点字」を習得するしかないというのが、私が到達した結論です。それを押し進める活動は、やはり

「識字運動」と位置づけるのがふさわしいと、私には
思われます。

ところで、この「識字」については、一般的にはあまりに普通のことであるためか、ほとんど資料がありません。私の調べが不十分なのかもしれませんが、どこから調べればよいか分からないほどに、「識字運動」の実際についてはそのドキュメントのようなものはありませんが、「識字」の概念や「非識字」の克服方法についての資料はほとんど見あたりません。

そこに、短編小説の形で、「非識字」を巡る悲劇を描いた作品を見つけました。正面から「識字」を扱ったものではありませんが、この作品から「識字」を除くことのできないほどに、重要な位置を占めています。「今日の日はさようなら」（二瓶哲也『文學界』二〇一三年九月号）、非識字者の苦しみと、未熟な少年の心情のすれ違い、主人公である、少年の異父弟の心の動きが描かれ、そこから来す悲劇で団円となります。

残念ながらここには「識字」についての考察はありませんが、私が知っている作品や解説書に、「識字」

を取り上げたものは、今までにありませんでしたので、目を見張るものを感じました。

考えて見れば「識字」は、文字を読み書きする人のもので、文字を読み書きできない人「非識字者（文盲）」は、文字で表されるものに手を染めるということとはあり得ないわけで、「非識字」に関しても、「識字」の立場から、「識字」を進めようという主張を述べる以上のものはないのは当然だということに、私も遅蒔きながら気付かされました。

以上が漢点字訳書の製作、漢点字の普及活動という本会の活動を通して、私が学び得た事柄です。

横浜漢点字羽化の会は三〇年の活動を終えます。後世の皆様にかが残せればと念じて、活動を行って参りました。将来的には、私どもの活動を批判的に評価し、後の視覚障害者の非識字の状態を払拭すべくご尽力下さる方の出現を、お待ち致します。点字毎日様が、このことを記事にして下さいました。ご精読いただければ幸いです。

了



点字から識字までの距離 一二八

山内 薫

識字を巡って

この連載のタイトルである識字（リテラシー）を巡って最近とても気になるテレビ番組があつた。それは、今年四月一六日にNHK総合テレビで放映されたクローズアップ現代「ヤバイ・エグい」は危険!? 注目される感情リテラシー」である。（<https://news.web.nhk/newsweb/na/na-k10014780551000>）

そう言えば、昨年あつたパリオリンピックのスケートボード男子ストリート決勝で、堀米雄斗が大逆転劇の演技を終えた後、解説者が「ヤーバー」といった声が今でも耳に残っている。

「やばい」という言葉はもともと「危険や不都合が予測されるさまである。危ない。もと、てきや・盗人などが官憲の追求がきびしくて身辺が危うい意に用いたものが一般化した語。」（『日本国語大辞典 第二版 一三巻』二〇〇二年 小学館）だったが、「②程度が激しいことを表す語。はなはだしい。ひどい。」

（中略）＜表現＞ 多く望ましくないことについていうが、近年、若者がプラスの評価に用いることもある。」（『明鏡国語辞典 第二版』二〇一一年 大修館書店）と、最新の国語辞典では、プラス評価に使われることが記されていて、マイナス評価よりもむしろプラス評価で使われることの方が多くなっているのではないかと思う。番組では「喜怒哀楽の感情すべてがヤバイの一言ですんでしまう。」ことを危惧していた。

間バイトなどで検挙され矯正施設に収容されている若い受刑者に共通する課題を施設の教育専門官らの職員が一樣に次のように述べている。

「感情を出さない。怒りもしない、笑いもしない。感情をどう出したら良いか分からない。」

「いわゆる出し子は言葉を知らないし、感情がない、表情がない」

「極端に言えば、『気持ちいい』とか、『うざい』とかいう二つのことばしか知らないような人が割といて、犯罪をやるときはちよつと発散して気持ちいいし、思いどおりにいかなければうざいみたいなことで、なかなか自分のコントロールもできない人が少なからずいます。」

そして、収容されている闇バイトに関わった若者たちも次のように述べている。

「単なる一つの作業としか思ってたので、何も思ってません。その時、感情はないですね。自分は九回したんですよ、それを。でも本当、何も思わなかったですね。結果を知っていても別に何も思わなかったです。今回の事件も、人に申し訳ないという気持ちも浮かばなかったですし、『強盗しろ』と言われたらたぶん普通に強盗してましたし、『人を殺して』って言われたら殺してましたし、たまに自分が怖くなります。四回目ぐらいのときに、指示役から『楽しいか？』って聞かれたんですけど、自分は、楽しいとか楽しくないとか感じていないし、ただ“こなすだけ”だったので『特にないです』としか答えてない」（二五歳）

「小さいころから自分の感情を押し殺してきましたね。何も感じないというよりは、人の気持ちがかんなくなくなってくるんです。全部うわべだけの会話でしたね。喜怒哀楽とか考えたことがないから、ちゃんとした表現力もなくて、『ヤバイ』。すべてがもう全部まるまる全部が『ヤバイ』としか出てこない」（二五歳）

「小さいときから感情を押し殺して感情がない状態で人形みたいだなとかって思ってたんですけど、中学のときにボーカロイドがはやって、それで自分はボーカロイドに近いんだっていうのは思いました。親の意のままに、親の求めるものに応えなくちゃいけないというか、そんな思いだったので、操られているなと感じてましたね。まず、泣きたいときに泣けないっていうのが一番ですし、怒りの感情がなかったです。笑うときもちゃんと笑えなかったもので、笑う勉強をしたりと、そういうのはしましたね」（二四歳）

一方で一五人以上の若者を闇バイトに勧誘したリクルーターと呼ばれる人物は次のように述べる。

「電話したときとか、『ちょっと最近どう？』『学校は大丈夫ですか？』と、親身に相談に乗ってあげるとホイホイついてくるっていうのは、つくづく思いますね。顔も名前も分かんない相手に、よくこんなことをこんなに話すんだなって思ったので、本当によつぽど周りに相談できてなかったんだと思いますね。つらいけど、誰にも理解できないけど、自分からは絶対に言えない。自分の気持ちを言語化できていない子とかって、すごく感情をコントロールしやすいとか、いいカモで、面白いくらいホイホイくっついてくる。

本当にびっくりするくらいみんな引つかかる。」（一九歳のリクルーター）

闇バイトに勧誘するリクルーターのマニュアルは

「▽この仕事（闇バイト）で重要なのは受け子・出し子との「信頼関係」。

▽傾聴して悩みや弱みをとことん聞き出す。こちらの話は一切しない。

▽「さみしかったんだね、つらかったんだね」と相手がことばにしなかった感情を言語化して安心させる。」というものだ。

龍谷大学教授の浜井浩一氏等が佐賀少年刑務所と多摩少年刑務所で行ったアンケートによれば

「犯行時の被害者への意識を聞いたところ」

・逮捕されて初めて被害者のことを考えた 四

四・七%

・被害者のことは考えたことがない 一

九・七%

・被害者がいるとは思わなかった

六・六%

「自分の気持ちが分からないときがありますか」

・いつもそうだ 一三・二%

・だいたいそうだ 二二・四%

計 三五・六%

・どちらともいえない 二二・四%

さらに、誰かに悩みを相談することを「ほとんどしない、全くしない」と答えた人は五五%と半数を超えた。その理由は

・言ってもむだ 三四・%

・自分の気持ちをうまく言えない 二七・%

・悩みを言う人がいない 二二・%

そして、アンケート結果から見えてきた特徴について次のように述べている。

「大きな犯罪が行われてるんだけど、その犯罪を担っている人たち一人一人が実は何も考えていない、マニュアル通りにロボットのよう動いているだけという状況になっているのが、闇バイトの最大の特徴。今回の調査でもやっぱり被害者のことを全く考えていない傾向が見えてきた。自分の気持ち、自分が今どんな状況に陥っていて、どんな問題を抱えているのということをうまく表現できないという。あるいはそれをちゃんと突き詰めて自分自身理解して考えようとしていない」

「日ごろ相談することがない、ほとんど何かあっても人に相談しないって回答している人が圧倒的に多い。気持ちがわからないだけではなくて、そもそも信頼できる相談相手が周りにいないというのが大きな特

徴として、今回の調査で見えてきたのかなという気がする。

闇バイトのグループも含めて、人間どうしの交流が全くないということが闇バイトの一つの特徴。要するに人の気持ちがかかるかどうかです。だから、そういった形で自我関与（※自分の考えや感情、行動についてよく考えたり、どうすればもっとよくなれるかを考えたたりすること）しなければ相手の気持ちも分からないし、相手を人間として見なさない。だからこそ効率よく、なおかつ被害者に対してもひどいことができてしまう。ある種、自我関与がしにくくなっているのが現代社会の大きな特徴で、闇バイトってのはそこにつけ込んで。こうした社会構造をうまく利用して、精巧なマニュアルを作って犯罪を成立させてるんだというふうに思います。」

＊

番組の後半では、かつて校内暴力だけがをする生徒が一〇〇人を超えた年もあったという大阪市立南市岡小学校で行われている「気持ち」を話すトレーニングが紹介されている。

どうすれば校内暴力を減らせるか、対策として取り組んできたのが、「国語教育の充実」。一年生の国語の授業で「気持ちを表すことば」のイラストが必ず使

われる。これをもとに、物語の主人公や登場人物の感情をことばにすることを学んでいく。

一年生の担任は次のように話す

「三年連続一年生を持つているんですけど、だんだん幼くなっているような感じがして、自分の気持ちを一個ぼんって言えない。入学当初は、ことばが出ないことでもかんしゃくを起こしていたり、教室から出て行ってしまいうこともあった子どもたちが、自分の気持ちをことばにすることができるようになることで、気持ちを伝え合ったり、互いの気持ちに折り合いをつけられるようになった。」そして、「ことばを最大限引き出すことと、『こういうことばを使うとあなたのモヤモヤは解決されるんじゃないかな』っていうことばの提案。この2つがめっちゃ大事だと思います。」と話す。

女兒の母親も「優しさだったり、いろんな気持ちの伝え方が、すごく豊か認知される日になったなというのを感じます。感情もいろいろあるんだって知れたということばは、本人にとってすごくよかったなと思います」

と述べている。

校長は「まず学校で安心してモノが言えるという、心理的安全性がないと『ことばで自由に気持ちを言え

る』ということもできないと思うのです。そのために、まず教員が信頼される大人にならないと、子どもは自由に話をしてくれない。自分の気持ちをはっきり相手に伝えるということがやっぱり一定、訓練がなかったら誰かに教えてもらわないとできないことやなっているんですよ。国語の授業で新しく出てきたことば、すぐ使いたいんですね。だから使い出すんですね。で、このことばをどういう意味なのかっていう、それを使っているうちに、そのことばと意味のつながりの精度があがっていくんです。言語化できたら大概のことは解決するんですよ」と話す。

*

以上見てきたような感情のリテラシーについて、感情について研究している法政大学の渡辺弥生教授が番組の中で次のようにコメントしている。

「だんだんデジタル化して文字媒体のコミュニケーションが多くなってきたので、いわゆる『ヤバイ』とか、短い言葉でやり取りするだけということ。なかなかお互いの気持ちを深いところまでコミュニケーションできてないということ。ライフスタイルが変化してきて、家族でリビングに集まるということ自体も少なく、集まったとしても、みんな、それぞれスマホを持って、それを見ているだけというふうな、そういうと

ころが感情リテラシーが乏しくなった原因になっているかなと思います。」

また、高校生への調査で一日二時間以上スマートフォンに接触していると語彙力が下がる傾向が見えてきたことに関連して

「スクリーンを眺めている時間が多く、見ている内容が、ボキャブラリーが限られたような内容であったりすると語彙力を学ぶということが少なくなる。受け身で見ているだけなので、自分から表現するということができない。語彙力を獲得するためには表現したり聞いたりということが必要で、それが少ないと、結局、考えるための材料となる語彙力がないので、こういう気持ちになるのは何でだろうという原因を考えたり、解決をするということができなくなるので、基本的にこういうところが乏しくなるんだろうと。」と述べている。

さらに、P A T C H T H E W O R L D というサイトで秋吉紗花という記者が次のように書いている。

「感情リテラシーは、老若男女問わずあらゆる人々が身につけたい能力である。不安定な社会情勢が続く中、鬱憤を自分の中で晴らせず、残虐非道な犯罪に手を出してしまう人も少なくない。近年では闇バイトのみならず『誰でもよかった』と言って簡単に見ず

知らず人を殺してしまう通り魔事件も相次いでいる。

殺伐とした世の中では、どんな人でも感情的になりやすく、それによって相手との関係が悪化してしまうこともあるだろう。コミュニケーションの方法も多様化し、今後ますます人間関係は複雑になっていくと予想される。そんなとき、感情リテラシーが身につけていれば、自分も相手も傷つけることなく、円滑なコミュニケーションが築けるだろう。『感情的にならない』『我慢すればいい』のではなく、自分や相手がいま抱えている感情をしっかりと理解し、その場で適切な表現を判断することを意識してみよう。」（ウェルビーイング 二〇二五・〇六・一一「感情リテラシーで変わる人間関係。感情に振り回されないためには」<https://mannen.jp/patchtheworld/21246/>）

最近のニュースで「誰でもよかった」と言って簡単に見ず知らず人を殺してしまう通り魔事件が毎週のように起きていること原因はこのあたりにあるのだろうか。

スマートフォンが普及してから、電車の中でそれを見ている人が多くなってきたことを日々実感している。五年ほど前は、座っている人の半数以上がスマートフォンを見ているという状況だったが、最近の印象では、ほぼ九割の人が見ており、さらに立っている人

までスマートフォンを見ている。隣にどんな人が座っているか、前にどんな人が立っているかなどには全く関心を示さずにスマートフォンの画面に見入っている状況は異様に見える。

人と人とのコミュニケーション能力がどんどん下がっていき、言葉の持っている力がどんどん希薄になっていくことを危惧する。字を読むこと（音声に変換すること）はできても、その意味が理解できなければ、それは詰まるところ非識字ということになってしまふ。AIが、様々な場面で浸透してきている現在、改めて識字（リテラシー）について考えなければならぬだろう。

＊

とうとうこの連載も終わることになりました。当初は表音文字である点字について、その後は東日本大震災を経て、南相馬への支援などについてたくさん紙幅を頂きました。今号にも書きましたが、言葉で生きる私たちが今後どこへ向かっていくのか、まさに混迷の時代だと感じています。また、とても残念なことは、未だに漢点字の必要性が認められていないという現状です。明るい見通しはありませんが、点字をより識字に近づけるための漢点字が普及することを願ってやみません。

醉中對二紅葉一
唐 白居易

臨^ム風^ニ 杪^ニ秋^ノ 樹

對^ス酒^ニ 長^ノ年^ノ 人

醉^ハ貌^ニ 如^ク霜^ニ 葉^ノ

雖^モ紅^{ナリト} 不^ニ是^レ 春^{ナラ}

醉中紅葉に對す
すいちゅう こうようにたいす

風に臨む 杪秋の樹

酒に對す 長年の人

醉は霜葉の如く
すいはそうようのごとく

紅なりと雖も 是れ春ならず
これはないなりといえども

杪秋 (びようしゅう) 晩秋

「杪」は木の梢から転じて、ものの末の意に用いられる。

酔つて、もみじ葉と向かいあう

唐 白居易

吹く風に枝葉を鳴らしている晩秋の木々がある。これをながめながらここに酒を酌む一人の老人がいる。
この老人である私の酔顔は木々の梢の霜に染まったもみじの色と同じであるが、私の顔の紅(あか)さが若き日のほんとうの紅さでないように、霜葉の紅さも春の花の紅さではない。
もみじは散りゆくさだめ、人もまた老い衰えるさだめ、ともにすでに春の花の色でないことを悲しむ。

「漢詩歳時記 秋の二」角川書店より



白居易

772～
846年





酔 中 對 ス 紅 葉 二

唐 白 居 易

臨 ム 風 二 杪 秋 ノ 樹

對 ス 酒 二 長 年 ノ 人

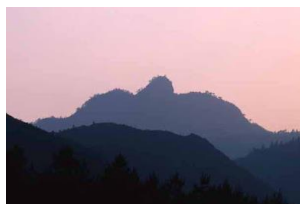
酔 貌 ハ 如 ク 霜 葉 ノ

雖 モ 紅 ナリト 不 是 レ 春 ナ

ラ

白居易が江州（江西省）に左遷され、廬山のふもとに移り住んだころの詩である。同じく廬山で詠んだ詩をもう一首。

こうろほうか ぼく
「香炉峰下 新たに山居をトシ
閣下に草堂初めて成り 偶 たまたま 東壁に題す」



香炉のような形の

香炉峰

日高く睡り足りて猶ほ起くるに慵し
ひ たかく ねむり たりて なお おくるに ものうし

小閣に衾を重ねて寒を怕れず
しょうかくに きんを かさねて かんを おそれず

遺愛寺の鐘は枕に欹りて聴き
いあいじの かねは まくらに よりて きき

香炉峰の雪は簾を撥げて看る
こうろほうの ゆきは すだれを かかげて みる

匡廬(廬山の別名)は便ち是れ名を逃るるの地
きょうろは すなわち これ なを のがるるの ち

司馬(役職の名で閑職)は仍ほ老を送るの官為り
しばは なお ろうを おくるの かんたり

心泰く身寧きは是れ帰する処
こころ やすく み やすきは これ きする ところ

故郷何ぞ独り長安のみに在らんや
こきょう なんぞ ひとり ちょうあんのみに あらんや

ご報告とご案内

前号でご報告致しましたように、横浜漢点字羽化の会は、今年度を以ちまして、活動を停止することとなりました。

それに伴いまして、本誌・機関誌『うか』も、今号一三五号を以ちまして、終刊とさせていただきますこととなりました。

約三〇年という長年月活動を継続して下さいました会員の皆様には、感謝の言葉を知りません。心より御礼申し上げます。

同様に、長年に渡りご支援を賜りました賛助会員の皆様、時に応じて貴重なご意見やご助言を賜りました各方面の皆様にも、深く感謝申し上げます。

また、本誌の音訳や点線文字の作成、さらに本会の活動の流れとしての『常用字解』の音訳等、本会の活動を周辺からご支援下さいました皆様、重ねて御礼申し上げます。大変ありがとうございました。

そして、漢点字を学んで下さっておられます視覚障害者の皆様、私どもの活動をご信頼下さいましたこと

に、深く感謝申し上げます。願わくは、習得した漢点字を、広く読書に生かしていただければ幸甚です。

思えば、故・川上泰一先生が漢点字を世に問うて、私も視覚障害者が漢字の世界を初めて知ることとなりました。

当時の視覚障害者を巡る世界では、この漢点字に対して、決して好意的な対応がなされたとは言えません。むしろ、「漢字の点字??」と、漢字を表す触読文字であることそのものに、疑念を持たれ、いや、見て見ない振りをしてやり過ごしておられる方がほとんどでした。

本会の活動は、そのような中で始まりました。そこで私どもの活動は、勢い、漢点字の有用性、触読文字であって漢字の持つ機能を充分發揮し得るものであるかというところから始めることとなりました。それは、岡田自身が試験台になって、漢点字を使って、どこまで読み書きができるかという、言わばテストパイロットになった気分です、多くの資料の漢点字訳を進めることとなりました。

『漢字源』の完成後、『論語』『唐詩選』に挑戦

し、『常用字解』の刊行とともにその漢点字訳に着手し、『萬葉集釋注』の製作に至るといふ、ほとんど一般の点訳活動ではなされないような活動となりました。

そこから分かったことが、「漢点字」は、触読文字としての「漢字」という位置づけにふさわしい文字であるということでした。視覚障害者にとつては、文字と言えは触読できる文字しかありません。それはルイ・ブライユの開発した六点で表示する「点字」しかありません。そこにわが国の標準表記である「漢字」を表す文字として、「漢点字」が登場しました。この「漢点字」が充分文字として機能するかということが、私どもにとつて最も気になることでしたが、幸い現在のところ、それを否定するデータはありません。

むしろ、「漢点字」を使おうとしない視覚障害者や、認めようとしなない視覚障害者周辺の晴眼者の皆さんに、この「漢点字」を使うことで、視覚障害者の文字の世界が開けることを、明らかにして行く必要が、現在もなおあります。

残念ながら本会の活動はここで停止しますが、その成果は、横浜市中央図書館にございますので、どしどしご利用いただきたいと存じます。

今年度の納入書として、『諸注評釈新芭蕉俳句大成』（堀切実（ほりきりみのる）、田中善信（たなかよしのだ）、佐藤勝明（さとうかつあき）編、明治書院）を準備しております。最後まで納入は叶いませんが、漢点字で読むことで、文学を鑑賞していただけるとは確かと考えます。

なお、本誌には、（参考資料）「字式について」は割愛せざるを得ませんでした。近い将来、漢点字データとテキストファイルとして、『常用字解』を、国会図書館に納入する予定であります。取り分け音訳者の皆様に置かれましては、文字の説明、字形の説明のご参考に供していただけますことを、願つて止みません。各図書館等を通して、お手にしていただければと存じます。

ホームページは、今暫く運用を継続致します。

東京漢点字羽化の会の活動は、継続しております。皆様方のご厚情に感謝して、この稿を終えさせていただきます。

編集後記

今号の岡田様の「顧みて」では漢点字羽化の会の

立ち上げから現在までの経緯を記しています。30年余りの活動を通してその情熱、行動力、コミュニケーション力に加え、よき理解者、協力者に恵まれ続けることができました。

今、Webで機関誌「うか」を創刊号から遡って見ていくと故川上泰一先生、漢点字ソフトの開発、万葉集、古事記等多くの漢点字図書の発行、インタビュー、後援会、国会図書館等への納入、厚労省からの感謝状等多くの実績を残し、貢献をされました。是非皆様も目を通していただきたいと思います。

私は10年ほど前にこの会に参加させていただきました。

朝日新聞の「医療」「歌壇・俳壇」、古事記、万葉集、芭蕉俳句全生等の入力・編集・印刷発送等に参加させていただき皆さんの熱心さに驚いています。

長い間ご愛読いただきました皆様心から御礼申し上げます。

宮澤義文

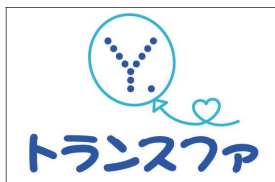
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集： 弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <https://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。